

オリンピックに学ぶ

2021年、東京に2度目のオリンピックがやってきた。しかし本当は3回目だったのかも知れない。

ハイ。それでは、スポーツを、オリンピックの歴史を一緒に学んでいきましょう。まずは、ギリシャ神話から。

光輝くエーゲ海、古代ギリシャ繁栄の象徴、パルテノン神殿 眼下に見えるアテネの街にはギリシャンブルーが注がれる。古代ギリシャは独特の文明を生んだ。その中で最も人々の心を湧かせるのがオリンピック。オリンピックはこの国で産声をあげた。

古代ギリシャでは都市国家の戦争が絶えなかった。それには理由があった。かつて4大文明にはそれぞれ大きな河川があり、土地が肥えて食物が育つ環境。しかし、ギリシャの土地は、斜面が多く平地が少ない、また大きな川もない。すなわち食物が育ちにくい土壌。そこで、食物をめぐり、家族や地域を守るため、身体を鍛えて、ある時は、隣人と闘うさだめ。しかし、このままでいくと、共倒れになり国自体が減ってしまう。

アテネから西へ300km程離れた所に、オリンピアという地域を治めていた王、イフィトスもそう考えた一人。イフィトスは、太陽の神アポロンに教を請うた。するとアポロンから「全能の神ゼウスに捧げるオリンピックを行え。そしてオリンピックの期間は戦争をしてはならない。」というお告げをうける。

イフィトスはギリシャ全土から猛者をオリンピアに集め、今から2800年前、紀元前776年。ここに「聖なる休戦」第1回古代オリンピックが産まれた、競技は男子のみで行った。種目は192mを走るスタディオオン走のみ。

次第に中距離走、長距離、レスリング、ボクシング、馬車競走、古代五種競技と増えていった。古代五種とは、「走る裸短距離」「幅跳び」「走り幅跳び」「槍投げ」「レスリング」と戦場で必要なもの。

それと、もう一つ、戦いに関係のない円盤投げがあった。それには大切なわけがあった。それは、古代オリンピックを始めるにあたり、円盤に「休戦の誓い」のサインをして、それをヘラ神殿に奉納。それをイフィトスの円盤と名付けられた。円盤は平和への願いが込められ

た宝物だった。

この様に、古代オリンピックは「聖なる休戦」の考え方が確立され、一度も中止することなく 1200 年間も続いた。

また、現在のオリンピックでは、このヘラ神殿で太陽光を集めて採火式を行い、それをオリンピックの開催地まで運んでいる。花瓶は神々の結婚式の様子。この様に男子は裸。女子は服を着ている。ギリシャの人々は神々に近づこうとした。裸は平等を示すもの。競技もすべて裸で行われた。

勝者には自分の彫像が与えられた。アテネは世界で初めて民主主義を確立した国家。富める者も貧しい者もひとり一票のルール、古代オリンピックは、平和への願いと、平等の価値を大切にすることで時代を超えて生き続けた。

しかし、ギリシャは北部のマケドニア王国に支配され、そしてローマ帝国に滅ぼされた。ローマ人はオリンピアの競技場に水道を建設したことでわかる様に、オリンピックを大切に思っていた。しかし、ギリシャ人だけだった大会は、次第に各国からも参加するようになった。また、ローマ時代のテオドシウス帝が、392 年にオリンピア信仰は異教と定め、393 年に古代オリンピックは終焉を迎える。

そこからオリンピックは、蓋をとじたまま時代は流れていった。古代オリンピックの終焉からなんと 1500 年、1863 年ひとりの救世主が生まれた。フランスのピエール、ド、クーベルタン男爵だ。

時を同じくして日本体育の父、嘉納治五郎が兵庫県神戸市御影に生を受けた。1868 年、年号は明治に代わり家族で上京。嘉納は帝国大学、現在の東京大学の第一期生として、柔道の創始者として日本の体育を牽引する立場にあった。

20 代、学習院大学の教頭をしていた 1889 年に、政府よりヨーロッパ視察の銘がくだされた。フランス、ドイツ、イギリス、そこで見た物は、陸上競技。水泳、球技、男女でスポーツを自由に楽しんでいた。

嘉納は驚いた。日本といえば、気をつけ、行進、突撃と言った教練、このままでは日本の体育教育では遅れてしまう。なんとかせねば。嘉納は教育改革に挑むが、逆風。1894 年は日清戦争、1904 年からは日露戦争が始まり教育体制は変わらないままだった。

一方、世界のスポーツは動き出した。1875年にドイツの考古学者クルティウスがギリシャのオリンピア遺跡を発掘し、古代オリンピックが開催されていたことを証明した。それを知った、当時少年だったクーベルタンは、いつかはオリンピックを復活させたいと思う。そして、青年となり、ヨーロッパの要人をパリに集めオリンピック開催への会議を行う。

そして、1896年近代オリンピックを、オリンピックの故郷ギリシャで甦らせた。場所はアテネ。その時の種目は、陸上、体操、水泳、レスリング、フェンシング、射撃、自転車、テニスの8種目。(ヨットは悪天候の為中止、ウエイトリフティングは体操の中で実施された。)

第2回大会はフランスのパリ、第3回はアメリカのセントルイスと大西洋を渡った。ロンドン五輪。第4回は1908年ロンドン。この大会から個人ではなく、各国の代表となるが参加国はまだ22ヶ国、アジアからの参加はなかった。

※(また、ロンドン大会では、審判や判定に対して、イギリスとアメリカがもめた。開催中のミサの際、ペンシルベニアの主教タルボットが「参加することに意義がある。」と説いた。のちにクーベルタンが演説でそれを引用した。)

そんな時、チャンスが訪れた。クーベルタンから、嘉納に国際オリンピック委員就任への要請がきた。嘉納はその要請を快く受け入れ組織づくりを始める、オリンピックに参加すれば国内の体育の認識は変わると考えた。

そして1911年7月10日、大日本体育協会を設立し、嘉納は会長となりオリンピックに参加する準備が整えられていった。当時、嘉納は東京高等師範学校校長。東京講師の2年生にマラソンの天才がいた。その名は、かなくりしそう。

そして東京大学の陸上短距離、三島弥彦。この時、政府に遠征の資金援助のお願いをしても、「かけっこをするのに学生が外国まで行くのかね。」といった具合。

嘉納は東京高師に後援会をつくり遠征のカンパを1800円(現在の500万円)募った。(三島の家はぶげんしゃだった。)嘉納はこの2名を引率し、アジアで初めて1912年明治45年の末、第5回大会スエーデンの首都ストックホルムオリンピックに参加した。

金栗は優勝候補にあげられていたが26km地点で途中棄権、三島は力が及ばなかった。しかし、日本は貴重な世界への扉を開いた。次の1916年のベルリンは第一次世界大戦の為中止、金栗は涙を呑んだ。

次はアントワープでオリンピックが行われた。その理由は戦争の痛手か大きかった為だ。ベルギーの国民はオリンピックで元気を取り戻した。この大会で日本初のメダリストが生まれた。テニスの熊谷一弥が銀。熊谷と柏尾誠一郎ペアで銀。また、この大会で団長を務めた岸は翌年、日本体育協会の会長に就任した。

次のパリはレスリングでアメリカ仕込みのタイガー内藤が銅メダル。また、この年から第1回冬季オリンピックがフランスのシャモニーで開催された。そして迎えた1928年オランダのアムステルダムで待望の金メダリストが誕生した。陸上三段跳びの織田幹雄、水泳200m平泳ぎの鶴田義行が金字塔をうちたてた。

鶴田は次のオリンピックでも優勝。日本人初のオリンピック連覇を達成した。(織田幹雄は有名だが、鹿児島県出身で明治大学OBの競泳鶴田義行の名前も憶えていただきたい。)

ここで忘れてはならないのが、郷土岡山の人見絹枝である。人見は現在の操山高校～日本女子体育大学に進みアムステルダムの800mで銀メダルに輝き、日本人女子初のオリンピックメダリストとなる。その64年後、郷土の後輩、有森裕子がマラソンで銀メダルを手にする。有森は祖母から人見の話しを子供の頃から聞いていた。有森は人見という人を心で見ているのだろうか。くしくも二人の銀メダルは8月2日だった。

そこから3年後の1931年、東京市から東京オリンピック誘致の話が持ち上がる。神武天皇即位2600年記念として、また1923年、関東大震災からの復興を加速させるためだ。

日本のスポーツの状況は1932年のロサンゼルスでメダル18個を獲得、うち水泳は12のメダル、水泳の監督は田畑政治。また三段跳びで南部が、馬術でバロン西が優勝し、日本には勢いがあった。

翌年に岸清一が死去。岸の死後遺言で、当時、100万円(現在の28億円)の寄付で日本体育会館がお茶の水に作られた。そして岸体育館(日本体育協会)として渋谷に移し、現在は、千駄ヶ谷に日本スポーツ協会として建設されている。岸は近代オリンピックの父と呼ばれた。また島根県庁入り口には立派な銅像がある。

岸がこの世を去り、また、嘉納の出番が回って来た。東京オリンピックの誘致である。1936年ベルリンのIOCの会議で、嘉納治五郎は「日本で五輪をやればアジアの小さな国も参加できます。崇高な理念を持つオリンピックは欧米だけのものではないはずです。」と力強い演説。オリンピックは東京に決まった。

1936年ベルリン大会でも、三段跳びで田島直人が16mを跳び、三連覇。水泳でも金メダルを量産した。棒高跳びの大江と西田の友情のメダルも話題となった。東京オリンピックの場所は駒沢、東京市は駒沢に111596人収容できる世界最大級のスタジアム建設計画を発表した。嘉納は嬉しかった。水泳日本を率いる田畑は燃えた。

そんな矢先、暗雲が立ち込める。東京オリンピックが決まり、一年も経たない1937年7月7日、中国の盧溝橋事件を発端に日中戦争が勃発した。日本は世界から非難された。「嘉納先生、日本は戦争をしているじゃないですか。オリンピックできるのですか？」というものだ。

丁度その頃、盟友クーベルタンが逝去、嘉納は悲しみを背負い、77歳の老体に鞭を打って、東京オリンピックの招致を確実にするため、エジプト・カイロのIOC会議に船で旅だった。何ヶ月かかったのだろう。そこで、各国のIOCの委員を説得して1940年東京大会を再確認できた。また、札幌オリンピックも決めた。

そして前年に亡くなったクーベルタンの追悼式に参加、地中海を北上しギリシャで式に参列し、そこからジブラルタル海峡を通り、大西洋を渡り、アメリカに寄り、今度は太平洋側に出て、カナダバンクーバーから客船氷川丸で日本へと帰路に着いた。ところが横浜港に着く2日前、嘉納は体調を崩して肺炎、帰らぬ人となってしまふ。最期を看取ったのは船に乗り合わせていた、外交官の平沢和重だった。平沢は嘉納を抱きしめた。オリンピックの旗が嘉納を包んだ。

それから2ヶ月後、とんでもないことが起こった。日本がオリンピックを返上したのである。日本は、世界は、戦争に突入していった。嘉納治五郎は、東京でオリンピックがあると思っでこの世を去ってしまう。そんなことはよそに、戦争はやまない。

東京から変わったヘルシンキでもオリンピックは出来ず、次のロンドンもオリンピックは中止、そして、1945年8月15日、終戦。

オリンピックは、というと、1948年からロンドンで再スタートするという情報が入り、水泳の田畑監督は喜び勇んだ。しかしドイツや日本はオリンピックに参加できないことが判明。「このくやしさをどこにぶつけよう。」田畑は考えた。

ロンドンオリンピックと同日、同時間帯に日本水泳選手権を開催した。日大に若武者がいた。橋爪四郎、古橋廣之進だ。ふたりは、ロンドンの優勝記録より速い記録を叩き出した。神宮

のプールは超満員、大歓声。「戦争にはまけたが、日本はやれるぞ。」若きスイマーは国民に勇気を与えた。

田畑はその頃から毎晩のように夢を見た。「お〜い 田畑元気か〜。」あっ、嘉納先生、「田畑、俺の柔道は東京オリンピックでできたか？いえ。そうか時期が早かったな。そしたらオリンピックは盛り上がったか？」

それが大会はできませんでした。と田畑。「なんやて。俺は命を賭けて東京オリンピックを誘致したんだぞ。」嘉納が消えていく。田畑は指導から距離を置き、東京オリンピックの誘致に一生を捧げると誓うのであった。

オリンピックは1952ヘルシンキから日本も参加が認められた。レスリング石井庄八が戦後最初の金メダルを獲得した。次のメルボルンでも、体操1、水泳1、レンリングで2つ金メダルをとりスポーツの一等国をアピールし、東京大会誘致の準備はできた。

(人の名選手を紹介しよう。三段跳びの小掛選手。取材のため何度も跳躍する姿を要求され怪我をしてしまう悲劇の選手だった。メルボルンの金メダルを逃した、そんな選手もいた。)

田畑は、日本政府にオリンピックの経済効果を主張。機は熟した。1959年5月26日、西ドイツミュンヘンのIOC会議、最終プレゼンターは嘉納の最期を看取った、あの平沢和重。「西洋で咲かせたオリンピックの花を、東洋でも咲かせていただけないでしょうか。」会場は拍手喝采。1964年オリンピックは東京に決定。東京にオリンピックが来る。田畑は空を見上げた。そこには満面の笑みで嘉納が微笑んでいた。

レスリングの八田一朗会長、中南米に顔の利く、和田勇も東京大会の開催に奔走した。1960年のローマ大会は体操が大活躍。ローマの次はいよいよ東京で開催される

1964.10.10 場所は千駄ヶ谷、国立霞ヶ丘陸上競技場。旗手は水泳、福井誠、選手宣誓はローマのチャンピオン、鬼に金棒、小野に鉄棒は、小野喬。最終聖火ランナーは1945.8.6 広島の悲しい日のその日、広島県で生まれた坂井義則に決まった。坂井のかぎす炎は世界に届く平和の光を予感させた。

競技に入るとウエイトリフティングの優勝を皮切りに、金メダルを16個獲得。体操5.レスリング5.柔道3.ボクシング1.そしてバレーボール女子東洋の魔女が優勝。駒沢屋内球技場は興奮のルツボと化し、大松監督は、静かにため息をつき、安堵の表情でそっと肩をなでおろした。本物の指導者だと思った。

東京大会を開催するまでの舞台裏を紹介します。それは、戦後から存在するワシントンハイッ団地をアメリカから変換させ、その跡地に代々木公園、代々木競技場、オリンピック選手村、日本放送協会を建設できたこと。

また、1940年、当時は幻に終わった、夏の東京オリンピック、大阪万博、冬の札幌オリンピックを、1964年・70年・72年で、すべてやり遂げた大和魂をここに記したい。また、家電三種の神器、新幹線の開通、首都高速の建設、日本は高度経済成長を遂げた。そう、東京オリンピックの最大のハイライトは閉会式ではなかろうか、

それは、国境を越えて、選手同士が腕を組み、弾むように行進、会場は割れんばかりの拍手、それは、見たことのない眩いばかりの情景であった。田畑は胸を張った。空を見上げると、嘉納先生が涙を流して微笑んでいた。

続くオリンピックはメキシコ。モントリオール、そして1980年のモスクワ大会。モスクワは私が日体大3年の時。日体大レスリング部はOBを加え5人の選手が代表に決定していた。佐々木、長内、南、藤森、高田。中でも高田先輩と南先輩は、同じ合宿所で寝食をともにした。そこは江戸時代、寛政の改革の頃に作られた世田谷にある茅葺の民家。そこでオリンピックを目指すOBと私達学生24人が共に暮らしていた。

高田先輩はモントリオールの金メダリスト。モスクワで2連覇を達成し、マットにキスをして引退する青写真を描いていた。しかしソ連がアフダニスタンに侵攻。これに反対するアメリカのカーター大統領。日本は大平総理大臣。世界中にボイコットを表明する国が増えようとしていた。

高田先輩は選手を代表して、日本体育協会、日本政府に対し、モスクワ大会の出場を訴えたがその願いは届かなかった。オリンピックに行くことはできない。オリンピック2連覇は出来なかったのではなく、許されなかつたのです。それは、男子のマラソン、体操、柔道の金メダリスト候補もそのショックは計り知れないものであっただろう。

それより以前にこんな大選手がいた。それは体操の神様、島根県立浜田高校から日本体育大学に進学した竹本正男。竹本先生は1940年東京、次のロンドン、またその次のロンドンと3回オリンピックを逃した。それでも諦めることなく競技を続けた。

そして、1952年ヘルシンキ、次のメルボルンで待望のメダリストになり1960年のローマ大会で金メダリストに輝いた。40歳になっていた。これが体操の神様と呼ばれる所以である。

また、広島の子内リエ選手は、女子で 6 メートルを跳びながら全盛期であった 1940 年代のオリンピック 3 回を戦争のため、すべて逃してスパイクを脱いだ。その無念さは本人だけしかわからない。

また、名前を知ろうとしてもたどり着けない名選手も数多く存在することだろう。オリンピック選手で、戦場で亡くなられた人は 34 名と聞く。

モスクワの後にはロサンゼルス。商業主義路線に入ったロサンゼルスでは東側がボイコット。次のソウルでは東西が揃った。斉藤仁、息子さんが全日本を制し、父の道を進む。一方、男子 100m でドーピング問題が発覚したソウル。続くバルセロナ、郷土の有森が銀を取った。野村、アトランタ。高橋、シドニー。野口、北島、アテネ。内村、山下、北京。村田、撫子、内村、清水、山口、荒木、三宅、ロンドン。伊調、吉田と横山、リオデジャネイロ。そして東京、女子バスケ、喜友名、入江、フェンシング、上野、ソフト。

パリ、ロサンゼルス、2032 年第 35 回は、豪州のブリスベンと予定されている。しかし、そこまで開催しても 140 年。古代オリンピックに比べると 10 分の 1。ずっと、ずっと、オリンピックが開催できる世の中であって欲しい。

私が 10 歳の時、人類が月に立った。どの家庭もテレビに釘付けだった。あれから半世紀が流れた。300 年後、いや 200 年後はオリンピックとパラリンピックが融合して、宇宙のどこかで同じ条件で大会が行われているかもしれない。そんなことも、夢見てみた。

私は中学から陸上を始めました。鴨方中学校に屋敷欣一という新任の先生が来られたからです。ある日、「ワシの家に来んか、広い庭があるんじゃ。」先生の家に着くと、そこは岡山県営陸上競技場だった。「どういうことかな？」と思って、中に入り右側の部屋に綺麗な奥さんと可愛い子供さんがいた。

先生は管理人をされていたのです。そこで合宿をしました。昼は猛練習、夜中には 400m のインターバルをやり、そのままウエイト場で先生と競うように腹筋、懸垂。ご飯も美味しくいただきました。私の競技スポーツのスタートは本当にありがたかった。『三つ子の魂、100 まで』また、屋敷先生から貴重な言葉をいただいた。

高校に進学する際、横山の行く高校は、沢山の教育者や著名人が出ているが、スポーツに関しては、「専門の指導者がいない、場所がない、強くなりそうな雰囲気もない。」すべてそろっていない。「だから頑張れ。大地を開拓する精神でやれ。」期待してる、と。

私は地元鴨方高校に進学して3年生の時に行われる地元岡山インターハイで6位入賞するという目標を立てた。鴨方高校の先輩に1964年東京オリンピック代表の金井秀太さんがおり、強く刺激を受けた。

槍投げ練習の成果は出た。私は高校2年生、陸上競技槍投げでインターハイを決めたが、その試合で右ひじをひどく痛めてしまった。それから体力をつけるはハードな練習を行ったが、肘の痛みは消えず、翌年、3年生の地元岡山インターハイは消えてしまった。

陸上部の仲間はとても真面目で、顧問の先生は人格者だった。それでも、ひとりで練習することも多くあり、そんな時、「今日は何をする？理由は？」と自分にベクトルを向けることは、確実に習慣化できた。

しかし、陸上では限界。無理だとその時点では負けを認めたと判断し、日本体育大学からレスリングの道へ。そこには、さらに厳しい道が待ち受けていた。

日体大レスリング部は、昨年の東京オリンピックまでに延べで71人のオリンピック選手を輩出している。そのうち、藤本先生が61人を出した。まさに名伯楽。先生はメキシコオリンピックの銀メダリスト（世界選手権は優勝）。

とりわけ、1970年代は日体大レスリング部、黄金期幕開けの黎明期。世田谷の小さな道場は闘志あふれる学生が『正攻法で前に出る』レスリングを叩き込まれ。5m先が汗の霧で見えなくなる程の、気が遠くなるような練習をしていたのです。藤本先生の名指導を忘れることはないでしょう

私の事をすこしお話しします。1979年大学1年生の1月10日にマットサイドで先輩の打ち込みの相手をしていました。するとスパーリングをしていた重量級の選手2人が私の右膝に飛んできた、その時、世界一の練習は何事もない様に続けられた。私の右膝は音をたてて折れ曲がった。

自分でも復活は無理かと思ったが、関東労災病院の中嶋寛之先生が、「横山君、かなり厳しい膝だが、この膝なら他にもそういう選手はいる。特別にサポーターを作ってあげるから、これを付けて、できるところまで頑張りなさい。」という言葉が胸に刺さる。

丁度その頃、前途のモスクワオリンピックのことで、日本スポーツ界に激震が走っていた頃だった。「弱い自分が泣きべそをかいている場合ではない。何のために東京にきた？」と、

ベクトルを自分に向けることだけはできた。

完治まで2年、また、そこから2年、教師になり1984年ロサンゼルスオリンピックの選考会に出る力だけはつけた。しかし、私の思いのレベルは、そこまでだったのかと反省しています。思うだけでなく、『思うと、本気で思える。ことが大切です』。できるはずなのに、なぜできない。という考え方が近いかな。

勿論、何故は自分で向けてくださいね。

そこから45年が経過して、2016年の秋、藤本先生がおかやま山陽高校に練習に来てくださった。1泊2日。その日は合宿所に泊まれ、2段ベッドの1階が先生。2階が私。寝る前に、「横山よ、金メダルはいつまでも輝き続けるが、メキシコの銀メダルは磨き続けないとすぐさびるからな。」という言葉が夜通し中、頭の中を駆け巡った。

こうして私は、偶然にも冒頭で紹介した、古代の五種競技をその順番通りに体験してきました。これは、生きる為のスポーツを習うことで、生かされている心を学び、反省しなさいということだったのかと、教師になって気づかされることになったのでした。

日体大で鍛えに鍛えられて、生まれ育った鴨方町に戻り、地元のおかやま山陽高校に勤務して41年目を迎えています。休むに1本加えて体育の体となります。今までのところ、まだ欠勤はありません。スクリーンの写真は60歳の時、ハワイホノルルマラソンの時のものです。

還暦まで担任や体育主任をやらせていただきました。この間、数えきれないほどの思い出や感動があります。部活動は、陸上20年、レスリングを20年、選手と共に学び、が喜びや悔しさを味わいました。その中で、陸上部に関わる思い出を聞いてください。

2007年から始まった東京マラソンは、岡山が生んだ日本スポーツ界のレジェンド有森裕子のラストランでもあった。また陸上界の至宝新谷は同じレースを走り優勝。そこから新谷は2度のオリンピックを経験して、3回目のパリオリンピックはマラソンで挑戦表明。出発点には東京マラソンを選んだ。

そして山陽OB 監物は、選手生活最後の道を東京マラソンと決意した。新谷と監物は同じ総社東中学校出身。ふたりは、それぞれの道を走る。

レースはケニアの2人は黄金の脚を披露して軽く優勝をさらう。監物は2時間10分29秒、新谷は2時間21分27秒の岡山県記録を上回る記録で走った。私は監物の最後の勇姿を目に焼き付けようと上京した。

3回声をかけることができた。13km 右手を上げてこちらを向いた。32km.単独走のなか、粘るというベクトルを自分に向けていた。42km 手前、完全燃焼に向かっている。そう感じた。「東京に来てよかった。」 あわててテレビ中継をみると、

選手生活に別れを告げる監物。パリオリンピックを目指す新谷。しかし、どの道自分との勝負。人生はスタートの連続。ふたりは、それぞれの道を走る。明け方、監物から長いメールが届いた。何回も読み返し震えた。卒業生、監物稔浩をリスペクト。青は藍よりいでて藍よりも青し。

※今こうして、テレビや新聞に出たことを話ししている私を、私は良いとは思っていません。努力し、人知れず世も中に貢献している偉大なる方は数多くいらっしゃることは、分かっているつもりです。お許してください。

最後に、おかやま山陽高校の泉に触れたいと思います。それは1923年9月1日、関東大震災の半年後、自分の理想と大きな夢を描き、焼け野原の東京に向かわれた鴨方の青年教師、創始者原田林市先生の行動です。原田先生の決断が、すべてのはじまりです。

原田先生のまかれた種は、時代を超え、持ち味教育として実を結び、生徒一人、ひとりが学校生活を謳歌しています。そして来年度は100周年を迎えます。『水を飲む時には井戸を掘った人の気持ちを考えよ。』

皆さまにも、原点があると思います。今日は、私の様な者にお時間をいただきましてありがとうございました。

皆さまのご活躍と出藍の誉れとなる様にお祈りいたします。

横山茂嘉